

武藤浩史 著

『『チャタレー夫人の恋人』と身体知
——精読から生の動きの学びへ』



2004年に武藤訳『チャタレー夫人の恋人』が出版されたときの感動と興奮を今でも覚えている。武藤氏の翻訳言語の新鮮さと躍動感に驚くと同時に、『チャタレー』は現代によみがえったと確信した。武藤訳『チャタレー』が存在しなかったら、授業で若い学生といっしょに『チャタレー』を読むこともなかっただろう。『チャタレー』は若者にウケた。より正確には、武藤版『チャタレー』はウケた。学生たちは『チャタレー』の原文・翻訳の言語世界に引き込まれ、授業では、教室内を過激な単語が飛び交いながら、熱い議論が展開された。私も、毎回の授業では、知的(+α)の興奮・快樂・感動を味わうことができた。

本書『『チャタレー夫人の恋人』と身体知』を読了した今にして思えば、私も若い学生も、武藤氏の翻訳言語を介して、

『チャタレー』のもつ「身体知」的可能性を直感的に感じ取っていたのかも知れない。「精読から生の動きの学びへ」と展開しうる契機と、意識することなく出会っていたのかも知れない。本書は、大胆かつ繊細なテキスト分析によって、『チャタレー』の身体知的要素を最大限に引き出し、既成の異性愛中心・性器中心の『チャタレー』像を見事に崩壊させ、〈生〉の文学としての『チャタレー』の現代的意義を訴えかける。さらに、他の文学研究書には見られない本書の魅力は、『チャタレー』を教材とした実に斬新で感動的な身体知教育の授業実践の様子が詳細に記録されている点である。現代を生き抜くための実学・実技としての文学への信念に基づいた、文学者・心理学者・ダンサー・講師らによる授業の様子は、従来の座学式文学教育では体験することのできない新たな刺激と驚きと感動に満ちている。

武藤氏は言う——「私たちは、現代という「悲劇的」な時代と向かい合う為に、ロレンスの最後の小説が伝えるメッセージを、時代に合わせて修正しながら受け継いでいかなければならない」。私も含め、たいていの若手・中堅研究者たちが、気恥ずかしさと格好悪さから、決して口にすることのないであろうこのような発言を、武藤氏は躊躇なくしてしまう。念のために言っておくと、この発言が意味するのは、ロレンスを過剰に神格化し崇拝したがる狂信的信仰心などではない。ここにあるのは、確かな文学的・文化的・思想的知に基づいた、若い世代に対する激しく優しくそして切実な教育的愛だ。

しかも、本書が、日本ロレンス協会の現会長による著書だから驚いてしまう。私のような平会員としては、リスクをとまなう新しい企画は若手にまかせて、会長はもっと偉そうに構えて

いてもよいのに、と思うのだが、武藤氏はちがう。みずから動き、挑戦し、変化しながら、アカデミズムの密室から飛び出し、若い世代に、生きるための実学としての良質の文学の価値と必要性を訴えかける。その本気ぶりは、本書から強烈に伝わってくる。

紙幅の都合により、武藤氏が披露するテキスト解釈を具体的に紹介することはできないが、あの斬新な新訳『チャタレー』の訳者武藤氏による『チャタレー』論である、おもしろいに決まっている（個人的に、「お尻」論がお気に入り）！ しかも、その精読の快樂が、自己満足的・自慰的行為で終わるのではなく、教育の現場での他者との〈インターコース〉へと展開される点が実にすばらしい。

本書には、新たな文学研究のみならず新たな文学教育の様々な可能性が詰まっている。もちろん武藤氏の授業実践をそっくり真似ることは難しいし、そもそも単なる模倣では芸がない。我々は、自分なりのやり方で、現代を生き抜くための文学研究・教育の新たなかたちを模索していけばよい。いや、模索しなければならぬ。その一步を踏み出すために、本書が与えてくれる勇氣と希望は、計り知れない。（筑摩書房、2010年5月、四六判302頁、2,800円）

——霜鳥 慶邦（福島大学准教授）